島根県立看護短期大学紀要
第10巻，35－44，2004

地域に密着した開業助産師の活動（第１報）
－出雲市の開業助産師の足跡を訊ねて－

灘　　久代

概　　要

お産が家庭でされていた頃は，開業助産師が活躍し，町や村では「産婆さん」と呼ばれ，その存在は高く評価されてきた。しかし病院や診療所での分娩が増加するにつれ，助産師の存在が希薄になっている。

母子保健に関する現況の問題を打開する為に，活躍された産婆の生き方を通して，今，助産師に，何が要求されているかを，出雲市の開業助産師の足跡や活動から検討した。同時に先人達が如何に助産師の職務を遂行し，地域社会に貢献したかを振り返った。結果，今も助産師は生活に密着し，家庭のなかの出来事に地道に関わる活動が重要であり，また，いかに求められているかの示唆を得た。

キーワード：助産師，活動，地域

はじめに

出産は古来，家庭内で行われるのが普通であり，ほとんどの人が自宅で出産していた昭和30年頃までは，多くの出張専門開業助産師が地域で活躍し，我が町や村では「産婆さん」と呼ばれ，その存在は，社会的にも高く評価されてきた。それが，時代の移り変わりにしたがって，急速な施設分娩に移行し，病院や診療所での分娩が増加するにつれ，かっては助産師の仕事であった分娩業務が，医師の仕事となり，助産師の存在が薄れつつある（高岡他，1987）。

少子化の伸展する今日，母親の育児不安や負担感，子ども虐待の急増など，その深刻化した問題が相次いでいる。こうした現況を打開し，助産師が地域の母子保健や健康生活に貢献できるために，今，助産師に何が要求されているかを活躍した諸先輩方の生き方を通して，改めて検討する意義は大きい。

そこで今回，出雲市における開業助産師の足跡や活動について調査し，先人達が如何に助産師の職務を遂行し，地域社会に貢献したかを振り返る事にした。

Ⅰ．研究方法

１．調査対象

出雲市の開業助産師と，功績を讃えるために建立された顕彰碑や資料。

２．調査方法

１）調査期間

平成15年６月～平成16年８月

２）面接内容および方法

インタビュー対象者の選択方法は，既に出雲市においては，現役の開業助産師がおられないために，地域のコミュニティーや健康福祉センターに問い合わせ，承諾が得られた方を対象とした。

面接内容は，地域での実践活動を中心に，インタビューガイドに基づいて半構成的面接法で行った。一人の面接時間は，２時間であり，面接で交わした言葉は許可を得て，すべてテープレコーダーに録音し，録音テープは逐語録に記録した。また，助産師個々の功績を讃えるために建立された顕彰碑や資料については，聞き書き調査とした。

3）データの整理方法

データは，面接及び顕彰碑・資料から聞き書きしたものを対象とした。また，面接によるデータは，ライフストーリーにまとめた。

4）倫理的配慮

面接の依頼に当たっては，事前に目的を説明し，承諾後，対象者の都合の良い日時に自宅に伺うなど，対象者の自己決定権を保証した。また，名前の公表や写真の掲載、面接時の録音などについても，事前に承諾を得た。

注）産婆，助産婦の呼称は，2002年，保健師助産師看護師法の改正により，助産師と変更されたが，本稿では時代を概観すると思われる箇所は，当時の呼称で表現している。

Ⅱ．調査結果

1．建立された顕彰碑および資料から知る助産師の活動

1）安井　ラク　産婆；1843（天保4）年～1913（大正）2年（写真1参照）

安井　ラク女は，天保4年に生まれ　大正2年の3月27日に亡くなっている。碑の建設時期は不明であるが，有志104名にて建設されている。碑銘は産婆安井ラク記念碑，記念碑の場所は古志町思案橋にある。

安井ラクの跡継ぎとして安井カメ，その後，カメの孫に当たる安井千恵子が，昭和11年大阪市の市立扇町産院で産婆の資格を取得し，帰郷後，産婆を引き継いだ（出雲市古志町誌編集委員会，1990）。その安井千恵子産婆もなくなり，安井ラクについての詳細は不明である。資料についても現在，ほとんど残っていない。

2）原　マサ　産婆；1846（弘化3）年～1927（昭和2）年（写真2参照）

原　マサ女は弘化3年，芦渡町の藤原家に生まれた。16歳で知井宮町嘉儀の原家（現当主，藤原重信）に嫁した。農業に精励し育児に努めたのち，1889（明治22）年産婆資格を得，以来，神門・神西地区の産家を奔走し，知井宮村の産婆として活躍した。

明治より30年間，産婆に従事し，知井宮布智神西各村において産家280の産児約1.000に達し，これを記念するために産家一同及び有志が碑を建てた。建立時期は1918（大正7）年9月，碑銘は産婆原マサ女壽碑，設置場所は知井宮町嘉儀町内にあり，碑の高さは台座とも2m40cmである。この碑建立のときマサは73歳，身体はすこぶる健康で，当時としては，まれにみる長寿であった事を祝って「壽」の文字が刻み込まれた（郷土誌神門編集委員会，1997）と伝えられている。

3）伊藤　キノ　産婆；1856（安政3）年～

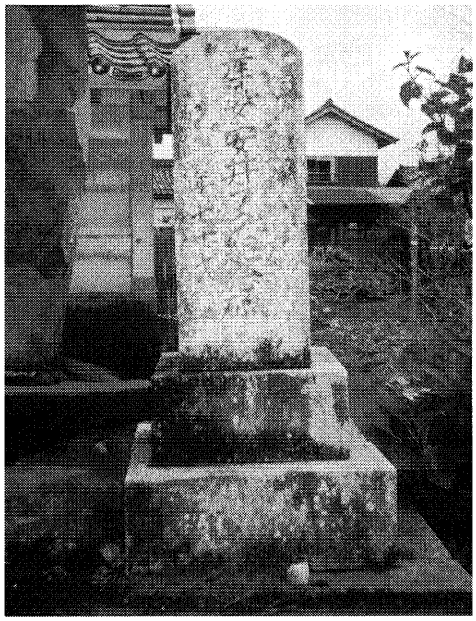

写真1　安井　ラク産婆の石碑

写真2　原　マサ産婆の石碑

1926（昭和元）年（写真３参照）

伊藤　キノ女は安政３年に生まれた。当時の西村（現，湖陵町）板津の出身で，現在の神門町沖上・伊藤拾次郎（現当主・伊藤英郎，今北屋）に嫁し，農作業に従事しながら一生を産婆として世に貢献した。明治の中期から大正期，当時の知井宮，布智，神西，園にかけての広範囲にわたって産家を奔走した。

建立時期は1927（昭和２）年11月，碑銘は産婆伊藤キノ刀自碑，碑の設置場所は神門町沖上町内にある。建立者は，知井宮・布智・神西・園各村関係産家である。碑の正面に「産婆伊藤キノ刀自」とあり，裏に「知井宮・布智・神西・園・各村関係産家建之」と刻み込まれており，自然石の素朴な，たたずまいである。碑面に「刀自」とあるのは，万葉の時代から「家事をつかさどる女性」に対して，尊敬の念を込めて使っていた言葉とされている（郷土誌神門編集委員会，1997）。

２．面接調査から知る助産師の活動

１）持田　キミエ　助産婦：1920（大正９）年生まれの84歳　出雲市乙立町在住

持田キミエ氏は，昭和10年の16歳の時に，三原産婦人科医院内（出雲市本町）にあった島根県指定助産婦看護婦養成所に入学した。そこで看護婦２年，助産婦２年の教育を受けた後，それぞれの検定試験に合格して一人前になった。

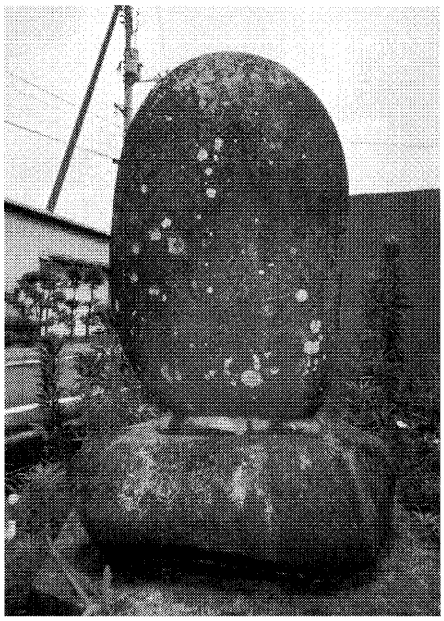

写真３　伊藤キノ産婆の石碑

入学と同時に，三原医院で見習いとして勤務した。当時，三原医院の奥さんが産婆で，お産に一緒について歩く者がいないため，産婆になって欲しいと言われ，先ず最初に産婆の勉強をし，次いで看護婦の勉強をした。検定試験は県（松江）に受けにいくため，看護婦の勉強が終わった後，５年目に看護婦，そして産婆の試験を受けた。見習いの間は，奥さんの鞄持ちについて回った。お産や流産があると先生と看護婦２人が行き，敷布団の上に油紙を敷き，腰枕を当てて処置をした。

卒業後，１年間はお礼奉公のため，三原産婦人科医院に勤務した。その後，京都の産婦人科医院で修業していたが，地元，乙立に県立乙立診療所ができ，そこに看護婦さんがいないので帰ってきて欲しい，との要請を受け，２年半で帰郷し、当時，無医村（昭和13年～）であった乙立診療所に勤めた。

当時のお産は，良家の人しか病院でお産をされなかったため，病院では普通分娩があまりなく，鉗子分娩や帝王切開など異常分娩が多く，忙しかった。

昭和20年，保健婦の免許取得のため１週間の泊まり込み講習を受け，その後，試験までの２か月を自宅で勉強して，保健婦の資格を取得した。

診療所で10年くらい勤めた後，自宅出産を主とした開業助産婦として，乙立地区はもとより，遠くは佐田町，所原町にも歩いて行き，最盛期には一晩に３人ものお産に立ち会うこともあった。当時は道路事情も悪く，車などもなく，徒歩で山道を越え，歩いて，行ったり，帰ったりの大変な仕事であった。特に厳冬の期，雪降る中を迎えの提灯に従い，診療器具を持って４km，５kmと歩いた。

お産が終わると汚れものは皆，綺麗に洗濯をしてから帰った。姑さんがおられない所は，ほとんど綺麗にして帰り，おられる所では，洗い物を区分して帰ってきた。また裕福でない家庭は，奉仕をした。

自宅分娩では，今のような難産はあまりなかった。一度，出血がひどくて，産婦人科の先生に来て診てもらったことがあった。それからは，時間がかかるお産には，先生に来てもらって診

て頂いた。また，お産で傷付けないように時間をかけて頭をゆっくり，ゆっくり出すようにしたので，下の方に傷を付ける事はあまりなかった。骨盤位は妊娠中に，少しずつ，少しずつ手で回すように（外回転術）した。しかし頭位に返しても，直ぐ戻るような場合には，骨盤位のままで，産道をゆっくり通過するように介助した。

産後は，母乳がよく出るように両手を交差させ，暇があると両腋下の内側を揉むようにするとよく出た。

後産は，ここは川が近くにあるので，川の近くから１mくらい河原の方に埋めてもらった。年寄りさんがおられると，方向を見て，人が踏まれるところが良いと言い，夜に穴を掘って四つ角や人が通る所に埋めていた（踏まれる事で，子どもの頭が堅くなり，体が丈夫になる（田中，1998）。あまり浅いと犬が掘るかもしれないので，ある程度，深めに入れていた。昔の事だから，新聞紙に包んで，持って行っていた。

後産の始末が悪いと，本人さんの産後の子宮の収まりが悪いということを年寄りさんが言われていた（また後産の始末の具合で，子どもの健否が決定し，これが一生の安危にかかるともいわれていた（田中，1998））。家庭で埋めるときには，十字路が良いとか，水の流れる所なら良いと，言われていたから，そのようにしていたと思う。

妊娠中，家庭に妊婦健診にいくと，何処も「こういう所によう来てくれた」と言って喜ばれた。産み月が近くなると，お姑さんに「お産が安産にならんような事もありますから，すみませんけど，近くになったら，あまり無理しないようにしてあげて下さい」と話した。

お産後は名付けまで毎日，沐浴に行き，６日目，お七夜の前の日には頭髪を，男の子は男の子らしく，女の子はおまんじゅうのように丸く鋏で切り，綺麗にした。産毛はおへそと一緒の箱に入れて渡した。その後の１か月は，２週間に１回訪問し，お産後１か月目に訪問した後は，特別な事がない限り行かなかったが，近所に行けば寄って「大きくなられましたか」と，声をかけていた。今でも「お世話になった」と言って下さる方がある。

16歳で見習い看護婦をしていた時，三原医院で生まれた赤ちゃんを１週間，沐浴したその赤ちゃんが，近所に嫁いで来られた。既にその方のお母さんは亡くなっており，その人も今では68歳になっておられ，お孫さんもおられるが，「母から産婆さんの話しは聞いていた」と話された，との事。

ある時，どんな事情かは知らないが，大阪から戸籍に入れてない赤ちゃんを連れて帰ってこられた方があった。出生証明書がないと戸籍には入れられないので，対処に困ったことが一度あった。また，家庭では十分に育てられないという方には，病院でお産をしてもらい，民生委員とよく相談して，病院を通して，子どもさんが欲しい方にお世話をしたこともあった。お世話した子どもさんは今では，皆，結婚して，子どもさんがいる。

自分自身のお産は，既になくなられたが，10歳ほど違う乙立のもう一人の産婆，曽田キヨ子さんにお願いした。生まれた子どもは2.250gしかなかったが，保育器がないので脱脂綿で帽子を作ってかぶせ，昔は，赤ちゃんが小さいと２回，沐浴をした。今なら，保育器に入れてお風呂には入れないでしょうが，今と逆の事をしていても丈夫に育っている。

昭和48年頃より，ほとんどが出雲市内の病院で出産するようになったが，病院から退院されると沐浴を頼まれたりして，昭和50年頃は沐浴を主にやっていた。

ここでは昔，お産をお世話した所から，七五三の時にはご馳走によばれた。どなたでもそうだと思いますが，母子共に健康にお世話ができたと言うことは，本当に，嬉しいというか，喜んで世話をしたような気がします。助産婦は２人の生命を預かっている重大な仕事です。いつも無事に終わればいいと願い，同時に，すこしでも皆さんのお役に立てれば，と思って仕事をしてきました。お陰さんで，お世話をさせてもらいました。

２）八幡　清子　助産婦；1928（昭和３）年生まれの76歳　出雲市稗原町在住

八幡　清子氏は，尋常高等小学校を卒業され

た昭和17年，15歳で簸川郡産婆看護婦養成所に入所した。看護婦の勉強を２年間した後，産婆を１年間，勉強した。

看護婦学校の１年間は家から通い，２年目からは，大原郡大東町にある晴木医院に見習い看護婦として入り，午前中は医院で働き，午後から学校に通っていた。戦時中の事で，空襲警報の中で勉強し，教科書も上・下巻の簡単なものしかなかったので，先生の講義を聴いて，それを筆記した。

晴木医院は，だいたいが内科・外科・産婦人科が専門であったが，大東という小さい所にあったので，患者さんは目だろうが鼻だろうが，何でも来た。

看護婦，産婆を卒業した後は，直ぐ晴木医院を辞めても何も分からないので，３年ほどいた。見習いを含めての５年間，難産などがあると先生について行って，お産の手伝いをした。勤めていた時のお産は，赤ちゃんが大きくて産まれないとかで，ほとんどが難産で，鉗子をかけたり，いきんで引っ張り出すといったお産ばかりだった。当時，お産と言えば産婆で、普通のお産は各地区の産婆がしていた。そのため，病院でするお産と言ったら異常ばかりだった。

産婆看護婦学校に入った動機は，高等小学校の時，先生からは師範を出て学校の先生になれと言われ，自分もそのつもりでいたが，代々産婆の家に，嫁いで来ることになったからである。実家は飯石郡三刀屋町の生まれで，父と嫁ぎ先が兄弟だった。私が生まれた時，父親の兄弟の所には既に長男が生まれており，たまたま，そこで代々産婆をしていた祖母が，私の臍の緒を切りにきて，丁度，女の子だったので，３代目の跡継ぎにさせると言う約束が，この時すでにできていたので，仕方なしになった。おばあさんも義母も産婆で，私が３代目にあたる。その事を高等尋常小学校卒業まで知らなかったので，卒業して他の道に進むつもりにしていたら，必ず産婆になって跡を継がないといけないといわれ，無理に産婆の道に進んだ。嫌で，本当は，やるつもりはなかった。

晴木医院では異常産ばかりで，産婆をするには自信がなかったので，晴木医院を辞めて鳥取の大学病院で勉強するつもりで実家に帰った途端，昭和22年に義母が脳卒中で倒れた。鳥取の大学病院には書類を出していたが「直ぐに手伝いに来い」と言うことで，急遽こちらに手伝いに来ることになった。義母が請け負っていたお産があったので，仕方なしにやっていた。だが嫌で，いつ抜け出そうかな，と思っていた。その後，だいぶん義母も良くなり，もう大丈夫かな，と思った矢先，脳梗塞が再発して，昭和23年の10月に亡くなった。それで心を決め，八幡家に嫁ぎ、昭和24年４月に出張での開業届けを出した。その頃はこの地区でも10人位助産婦がいたが，今では、みんな亡くなってしまった。

昭和21年は終戦後で，稗原でも100～110人も生まれた。それを義母が一人で歩いて，夜も昼も寝ないで介助をしていた。義母はだいたいが高血圧で，無理をして，それで倒れたのではないかと，思っている。それからは，お産が84～85人くらいに減り，自宅分娩は，昭和45年くらいまで続いた。忙しい時には、一晩に３つものお産が重なり，各々の産家を行ったり来たりした。

お産は昔，みんな畳の上でしていた。戦時中で，今みたいにナイロンなど物のない時代だから，お産のときは，油紙を敷き，その上に布切れを敷いてお産をした。開業した当時は，家々の姑に「昔，お産はこういう風にしていたもんだ」と言われると，それに逆らうわけにはいかず，油紙の上に，わらを焼いた灰を半畳ほどの布袋に入れ，わら布団を作った上で，大丈夫かな，と思いながら，お産を介助した家庭もあった。今，考えると不潔で，想像もつかないようなお産をしていた。

お産はほとんどが仰向けであったが，たまに，背中が布団にもたれかかった姿勢の方が良いと言われ，座位のお産を１・２度経験した。わりと楽にお産をされた（座産といい，全身の力を出すには都合が良く，昔はこの方法で，俵にもたれて産んでいた（田中，1998））。

骨盤位は，妊娠中に回転させて治していたが，お産が始まってしまうと治せないので，骨盤位のままお産するしかなかった。何とか無事にお産ができたが，苦労した。難産はわりになかったが，出血が多い時など，何かあれば近医の古瀬医院が，その当時は産婦人科だったので，先

生に来てもらい，止血をしてもらっていた。ここは無医村ではなく，腕の確かな先生が近くにいて，直ぐに来てくれたので心強く，安心してお産に携わる事ができた。逆に古瀬医院でお産があると，私らが行ってお産を取り上げていた。未熟児はわりと少なかったが，生まれると保育器もないので，柳行李の中に湯たんぽを入れ，その中で育てた。1人，先生に往診してもらい，色々と手を尽くしたが，亡くなった未熟児がいた。普通のお産で，亡くなると言うことはなかった。

産後，母乳が出るように，温シップとマッサージを行っていた。

後産は家庭で，土の中に埋めてもらっていた。埋める場所は，だいたいお墓や山の方に埋めていた。昔からの，そこのしきたりや，やり方で行っていた。

お産が終わると1週間は沐浴に通った。その後は頼まれると行った。お産の数が多いと，1週間の沐浴だけでも精一杯だった。ほとんどが，この地域だけであったが，山道があり，自転車で30分から1時間くらいかかった。

妊娠中は指導に回ったり，「見て下さい」と言って，家に来られる方もいた。妊婦健診に回ると何処でも喜ばれた。この辺は百姓ばっかりで，そんなに楽な生活ではなかった。姑さんに「昔は働きながら子どもを産んだものだ」と言われると，お嫁さんも働かないわけにはいかないから，わりと皆，産まれるまで働いていた。ただ，その時に診察した妊産婦さんの状況で「あまり無理をしてはいけない」と，姑さんに話をしたり，食べ物の話などをした。

その頃のお産の費用は，決まったものがなく，向こうがお礼だと言って渡された額をもらっていた。お産の時には，脱脂綿や油紙等は家庭で準備してもらっていたが，色んな家庭があり，全然，何もない所もあった。そんな所は，生まれた赤ちゃんが着る着物も無いので持って行っていた。またお産に行っても，お金が払えない家庭もあり，分娩料がもらえなくても頼まれたら行くしかなく，たいした収入ではなかった。最終的な集計はしていないが，開業してから手掛けたお産は700人位である。

子どもは3人産んだが，お産をした1か月は，仕事をしないようにしていた。そのころは産婆さんが2人いて，請け負っていたお産は，その人達に頼んでしてもらったので，お産で休んでいる1か月は，子どもも身体もわりと楽であった。その後は，お産があると夜，昼関係なく出て行っていたので，子どもが可愛そうであった。お乳がたくさん出たので，家にいるときは母乳を飲ませていたが，お産で外に出ている間は，乳が張ったが，ミルクを飲ませてもらった。子育ての時はみんなに協力してもらったが，大変だった。

昭和39年，助産所開設目的で調理師の免許を取得した。しかし，出雲に出てお産をする人が増えたので，開設をあきらめた。昭和45年頃には，ほとんどの人が出雲に出てお産をされるようになり，その頃から古瀬医院に，看護婦として昭和60年頃まで働いた。

昔は，お産でお世話になる，または，お世話になった産婆さんを，最初は5か月の帯祝いに，その次は月祝いと言って妊娠10か月の始め，つまり，生まれる月の初めにお祝いがあった。また生まれると，名付けの時，1歳の誕生日，七五三など，夫婦両方の両親や親戚みんなが集まってお祝いをする時にはよばれて，行っていた。今では考えられないが，昔は行事が多かった。この辺は昔，お祝いの時にはお餅をつくので，年中，お餅が切れる事がなかった。ただ，お産に呼ばれると，お産ばかりは何があるか分からないので，産家への行く道中「無事に生まれますように」と，心の中でいつも祈ったものだった。お産が無事に終わり，お母さん，赤ちゃんの元気な顔を見るのが喜びであった。助産婦は，良い仕事だと思ってしてきたし，やっていて良かったと思う。そして、よく妊産婦さん達が、自分に命を預けてくれたものだと思う。

平成11年5月7日　日本助産婦会会長表彰を受ける。

3．出雲市の産婆教育

人間の歴史が始まって以来，人々は何らかの形で妊娠や出産に関わってきた。時代の推移の中で，その関わりの主役は経験の豊かな女性(親類の者や，年配の人)が行っていたが，日本

写真４　簸川郡私立産婆看護婦養成所卒業生
（明治44年２期生）

では江戸時代から産婆として職業化し，だんだんと専門家にゆだねられるようになった。

1899（明治32）年に制定された産婆規則は，日本初の助産婦の業務・資格・教育を規定した全国共通の法律で，身分も確立し，専門職業として位置づけられ現在に至っている。この法律の前身は，1874（明治７）年に公布された医制である。医制は76条から成り立ち，その内の50～52条に産婆に関する内容が記載されている（厚生省医務局看護課監修，1979）。

近代助産婦養成は，明治９年，東京では長谷川泰が養成を始め，大阪では大阪医学校病院で産婆教育が開講したのが始めとされる。明治14年には，民間初の産婆養成所が開設され，本県では1891（明治24）年松江の開業医，森本文斉が私立松江産婆養成所を設立し，旧斐川郡（現，出雲市，平田市及び簸川郡）では，1907（明治40）年，開業医，三原介人・錦織良三郎は今市に，川原良次郎は平田に，自家診療所に各々産婆養成所（簸川郡私立産婆養成所）を開設した。写真４は，三原介人が自家診療所である三原医院に，1911（明治44）年，簸川郡私立産婆看護婦養成所を開設した（修業年限看護婦２年，産婆２年）後の，第２期生の卒業生写真である（現，三原医院の院長，三原淳良氏からの提供）。

尚，聞き取り調査を行った八幡清子助産婦の夫の祖母，故八幡リンは，「産婆規則」が制定されて，初めての産婆試験を受け，合格した産婆である（写真５参照）。

Ⅲ．考　　察

人の生まれる一大事に関わるのが助産師であり，自宅で分娩が行われていた頃は，地域の人々から親しみを込めて「産婆さん」と呼ばれ，人望があった。その背景には，技術的にも非常に優れたものを持っていたと同時に，生命を限りなく尊重し、人のため、社会のために我が全力を傾けて妊産婦や家族の方々を大切にし，価値ある仕事として，仕事に満足感と達成感を感じながら，仕事に従事してきた開業助産師の活躍があるからである。

天野（1976）は，専門職について，営利原則ではなく，公共原則を強く要請される職業であると述べ，日野原（2002）はプロフェッションとは，第一は，自己の利益より人類社会への奉仕を主眼とする。第二は，技術で長期間にわたる厳しい訓練を必要とする。第三は，生命の威厳とケアを考えて行動する。第四は，科学，哲学，宗教，倫理などと触れあう職業，の４つに集約できると述べている。

聞き取り調査した助産師は，戦前から戦後にかけて自宅出産を手がけて来られた方々だが，語りの中には，こうした専門職としての職業観がまさに映し出されていた。例えば，お産に呼ばれれば，誰であれ，何処であれ，常に出向き，損得を考えず，２つの生命を守るために我を忘れて献身的に母と子を支えてきた。同時に，お産は母児の健康や生命に関わるだけに，終わるまで何が起こるか分からない。そのため，

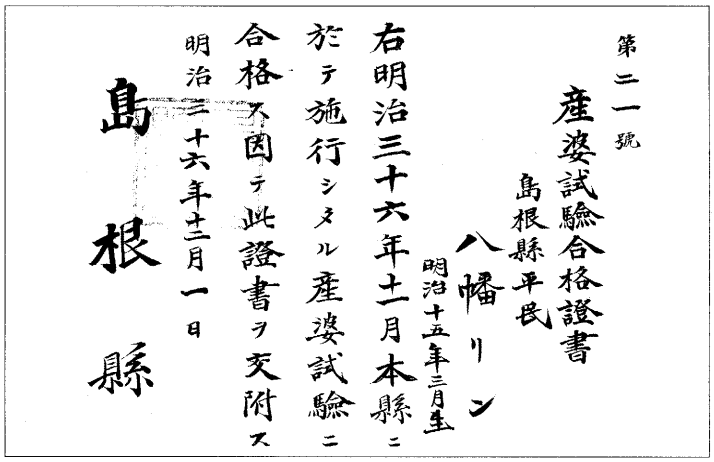
第二一號
産婆試驗合格證書
島根縣平民
八幡リン
明治十五年三月生
右明治三十六年十一月本縣ニ於テ施行シタル産婆試驗ニ合格不因テ此證書ヲ交附ス
明治三十六年十二月一日
島根縣

写真５　産婆規則制定後、初の産婆試験の合格証書（八幡リン）

ひたすら無事を祈り，技術を磨いて介助を行ってきた。しかも，助産師はお産に立ち会い，胎児を取り上げればそれで仕事が終わるわけではない。産後はお七夜がすむまで毎日産家先に通い，沐浴，授乳指導，局部の消毒などを行って母子を支えた。また妊産婦の家庭の巡回訪問では，地域を見回りながら，民家の縁側で妊産婦さんや姑さんと世間話をしながらも，少しでもお嫁さんが楽になり，異常なく出産できるように，生活の実権が誰にあるか，を考えながら誠意に対応した。また一方では，お産にまつわる伝統を守りながら，仕事をし続けてきた。特に，昔の町や村では無医村が多く，妊産婦は勿論のこと，一家・地域住民の健康相談役としても産婆が唯一の頼みの縄であり，地域で重宝がられた事は，それぞれの建立された顕彰碑からも，その功績や存在が推測される。このように助産の業は，困難な仕事ではあるが各々が，何十年もにわたり助産師職一筋に従事し，たゆまぬ精進努力を続けてこられたのである。しかも地域や各々の家庭にとけ込み，相手の喜ぶ仕事をする，仕事をする事で相手も自分も幸せにすることを目標に，助産の職業に一生涯を賭けたのである。

宮里・大林（1988）の対談の中で大林は，「佐久間兼信は助産婦という呼称をめぐって，緒方正清先生が助産婦と改めた方がいいと提唱されたが，木下正中先生は，産婆という婆の字を老婆と考えず，婆は親切の意があるから，親切を旨とすべき職業の名として保存するのもよかろうと言われた」とのことである。しかし産婆は，昭和27年には助産婦，平成14年からは助産師と改称し，同時に地域に深く根を下ろしていた産婆・助産婦は，病院などの施設へと仕事場が変化していった。そして，母性と乳幼児を取り巻く社会環境は大きく変化した。

少子化，高齢化が進む中で，母性の未熟，育児の困難，児童虐待，思春期の性の健康など，リプロダクティブ・ヘルスに関わる問題が増し，助産師の保健サービスの必要性が求められている。助産師は時代の変遷に対応しながら何時の時代でも，お母さんと赤ちゃんのために，少しでも安全で快適な生活ができることを願い，産婆として活躍した人たちの職業意識を持ち続けて仕事をしていることに変わりはない。しかし，病院という囲まれた建物のなかで業務をしていると，地域社会の中に足を踏み入れ，地域の実状を目のあたりにして問題と向き合うのとは異なり（石塚，2003），妊婦さんとその家族の問題が必然的に見えにくい状況にある。

妊産婦・新生児をはじめ、保健サービスを求めている人たちは健康な生活人であるだけに，生活に密着した指導・援助を必要としている。助産師はその事をよく認識し，日常の生活の場である家庭や職場や地域社会における生活環境に目を向け，ざっくばらんに何でも話せるような人間関係を進め，一人ひとりの把握と，心のこもった温かな励ましが特に都市化された環境では大切といえる。しかも，そうした家庭のなかの出来事に配慮した地道な活動が，今も助産師に必要とされていると思われる。

Ⅳ．終わりに

今回，出雲市における開業助産師の足跡や活動について調査し，先人達が助産師の使命として人間愛の基に，如何に職務を遂行し，地域に貢献して人々から感謝され，頼りにされ尊敬されてきたかを再確認する機会となった。

全国には，まだまだ経験豊富な開業助産師達が，偉大な業績と，それぞれの永年の経験から独自に育まれた助産術の秘訣を持ち合わせ，社会の期待に応えながら地域に根ざした活動をされている。われわれは，諸先輩方と積極的に語り合う事で，１つでも多くの助産の技と心を学び，また確認しあい，それを道しるべとして，助産師自身が世代を経て受け継ぎ，育てていく事も職務を遂行していく上で重要である。そのためにも，１つでも多くの足跡を，残しておきたいと思う。

謝　　辞

本研究にあたり，ご指導頂きました本学前学長　恒松徳五郎先生をはじめ，調査に快くご協力頂き，貴重なお話や資料を提示して頂きました三原淳良先生，持田キミエ助産師，八幡清子助産師、藤原重信氏の皆様に記して心より謝意

を表します。

文　献

天野正子（1976）：職業と開放，人間発達研究１，お茶の水女子大学心理教育研究会，1-14.

石塚和子（2003）：助産所とその役割，産婦人科治療，86（1），18-21.

出雲市古志町誌編集委員会（1990）：産育，古志町誌，出雲市古志町誌刊行委員会，527-529.

郷土誌神門編集委員会（1997）：郷土誌神門，郷土誌神門刊行委員会，479-486.

厚生省医務局看護課監修（1979）：看護六法，日本法規，591.

高岡スミ子，古崎すみえ（1987）；産婆の実践活動と歩みから学ぶこと(1)，助産婦雑誌，41(5)，51-56.

田中新次郎（1998）：西院民族叢書４，村と家・人生－因幡・伯耆の産育習俗，島根日日新聞社　，141-143.

宮里和子，大林道子（1988）：対談，歴史から学ぶと言うこと，助産婦雑誌，42(4)，44-52.

日野原重明（2002）：「本職」こそが幸福を呼ぶ，91歳私の証・あるがまま行く，11/30付朝日新聞.

A Comparison of the Historical and Modern Practice of Midwives in IZUMO City

Hisayo NADA

Abstract

In older the times , when women often delivered children at home, a midwife was familiarly called a nickname such as SANBA and her professional achievement was highly respected. But as the number of childbirths increased in medical clinics and hospitals, midwife activity became inconspicuous. I thought it important to trace the historical activities and achievements of midwives and then to compare those with modern midwife activities. My investigation was carried out in Izumo City. I found three stone monuments honoring the great contribution of midwives to delivery and child care in their communities. And midwives who had practiced for many years in small, remote towns told stories from their work . The principal part of a midwife's job is to deal with birth. This work has remained unchanged. But, a midwife today is much more involved in household affairs than in past. She should have a closer relationship with the client's household and provide increased community-based support.

Key Words and Phrases: midwife, duty , activity